

日本語に受容される英語動詞 についての研究

—— get の和語化にみる意味拡張のパターン ——

加 川 博 子

キーワード

受容, 英語動詞, 意味の拡張, 和語化

0. は じ め に

日本語に外来語としての英語動詞が借用される場合、日本語の既存の動詞と併用され、意味・用法上の棲み分けを行う。このとき外来語がどのような意味変化をおこすか、既存の和語・漢語動詞とどのような関係をもちながら日本語の枠組みに組み込まれていくのかを明らかにする。

外来語動詞が受容され、本来の英語にはない意味拡張を起こした典型的な例として *get* をとりあげ、以下の4点について明らかにする。

- 1) 受容された英語が新しい意味を獲得するプロセス。
- 2) 類義語としての既存の和・漢語（得る・獲得する等）と *get* との使い分けの条件と意図。
- 3) 和製英語複合語の語構造上の特徴とそこに観察される言語意識。
- 4) 漢語受容から欧米語受容へシフトすることによって起こる日本語の質的变化。

「*get*」は本来の意味である「得る」の意味範疇から、「～になる（変化）」の概念をカバーしはじめていると考えられる。本来の意味が日本語独自に意味拡張を起こすパターンを帰納する一階梯としてこれをとりあげる。

この作業は、言語接触の中の外来語受容における日本語のあり方を通して、日本語話者の言語意識やものの見方の特徴と、これからの変化の方向性を探ることにつながるものと位置づける。

1. 先行研究の問題点

外来語に関する研究は多く、特に石綿敏雄2001より、その歴史的背景、語彙分野ごとの特徴、語形・音節の慣熟化の方向についての体系的な整理が試されている。しかし、ここで扱おうとしている「液晶テレビゲットしちゃった。」のようなあたらしいスタイルとしての外来語サ変動詞の姿は、従来の研究で扱われた外来語と異なった性質を持つと考える。

従来の外来語は新しい概念を取り入れるにあたって新しい語を必要に迫られて受け入れ、それを日本語の枠に組み込もうとしてきた。これに対して現在のこの「ゲットしちゃった」は、それが英語であることを主張し、「手に入れよう」と言っては表現できないニュアンスを表現しようとしているといえる。ひとつのファッション・スタイルとしての外来語使用という面がある。

いずれにせよ、外来語の問題は、言語接触下においてソースⁱとなる言語と受け入れ側の言語の間でどのような枠組みのずれをみせ、それがどのように解消されていくか。日本語で言えばいかに「和語化」していくかを課題とすることになる。本研究では、英語を受容するにあたって日本語として新たな意味を付加する例をとらえ、これを外来語受容史の新たな展開と考えるものである。

1.1 英欧語外来語受容史上の問題点

ここでは、先行研究を概括することで、英欧語外来語受容研究の上で、どのような問題が扱われ、本研究がどのように位置づけられるかを整理したい。

英欧外来語とここでよぶものは英語・ヨーロッパの外来語をひとつに括ったものであるが、この始まりは16世紀室町時代末期のポルトガルとスペインとの接触によるものである。

英語外来語の受容は幕末から明治の文明開化期からはじまる。石綿敏雄2001は明治時代前半期における外来語摂取の特徴を整理する中で、かたこと英語、書生英語、マドロス英語をあげている。

かたこと英語：てんきょー (thank you) うーすけ (whisky)

など開港場で外国人と接触することにより発達した実用
向けの話し言葉。

i 言語接触において影響を与える側の言語

書生英語：英語学習を基盤として西洋の学術を取り入れようとする学生たちが、日常の話の中でもしきりに英語を使用したもの。ブック（洋書）やファーザー（父親）にいたるまで英語が用いられた。

マドロス英語：当時の外国船員が使った言葉が伝えられたもので、ゴーヘー（Go ahead!）ボースン（boatswain）ワッチ（watch）など耳で聞き取った英語の発音がそのまま伝えられている。

この時代は現在と比較すれば外国との接触は限定的で、外来語は港から入ってくることが多かった。マドロス英語やかたこと英語などにその特徴が表れている。この外来語受容では、英語の発音をまず耳で聞いて、そしてそのあとその言葉の意味を模索するという習得方法が一般的だったと思われる。いわば文字化されない語の音そのものとしての受容である。

しかし現代は英語教育が盛んになり、テレビでは英語教育番組が放送され、英語に関する辞書などの文献も数多く存在する。現代の英語受容では、英語の単語とその訳（意味）とが同時に取り入れられ、発音はその表記をもとにして日本語の音韻の枠組みに変換されるという特徴が挙げられる。英語研究が盛んになるにつれ、英語受容が音そのものを取り入れた借用から、表記を取り入れた借用へと移行していく様子が見て取れる。

つまり、音中心の外来語受容から文字中心の外来語受容への流れがあることがわかる。しかし、ここにはローマ字表記からカタカナ表記への転写という過程がある。本稿が扱おうとしている外来語においては、「GETしよう」などのような原語の表記をそのまま使おうとするものがある。カタカナ表記を必須のものとしめない段階があるとすれば、それは従来の外来語とどのように違い、どのような背景をもち、どのような言語意識のなかで使われているかが問題になろう。

1.2 翻訳借用をせずに単純借用することの背景について

原語の発音をそのまま受容した単純借用に対して、既存の語彙で翻訳をおこなった借用があるがこれについては、ここであつかう外来語受容とは異なった段階の和語化を経たものであるので深く触れない。しかし、外来語受容史の初期にみられた音そのものの受容とは違い、翻訳が可能な語を意図的

に翻訳しないという受容態度がある場合、その背景にある社会的背景・言語意識が問題になろう。

石綿敏雄2001では次のような例を挙げる。ⁱⁱ

新しい言葉の登場と、その問題を考えるためにひとつの例を取り上げてみよう。VANという言葉であるが、この言葉ははじめ専門業界で取り上げられ、内容も次第に変貌した。1980年代に入ると、さらに進んだ段階のものにかわり、さらに普及して、ジャーナリズムで取り上げられていく。

(中略) 一般的に翻訳語として取り入れればわかりやすいといわれる。しかしすべてがそうであるわけではない。このVANの解説の中に「日本語で‘付加価値通信網’と訳されている。英語からの直訳に近いが、これだけでは中身がさっぱりわからない」とあるように翻訳すればわかるというわけでもないようである。

ここでは、専門分野内の特殊な用語がジャーナリズムによって一般に普及する過程を紹介し、既存の日本語で翻訳することがわかりやすさにつながらない例が挙げられている。このようないわば「必要に迫られた不翻訳」もあるが、本稿が扱おうとしている外来語は、いわば「必要に迫られない不翻訳ⁱⁱⁱ」である。ここには簡潔さ、分明性、そして伝達する上での利便性とは対局にある、雰囲気、ファッション性、新しさ、が求められている。何かしらのイメージコントロールが働いたものと考えられる。本稿では特にこの点について、外来語を使用する意図・意識の調査からその実態を明らかにすることを目的としている。

2. 方 法

意味拡張を起こす外来語動詞の分析を行うためのデータは、書記言語・口頭言語いずれにしても新しい表現を好み保守性の弱いものである必要がある。^{iv}言語的に規範性の強い内容のものをさけ、雑誌、広告、日常会話、テ

ii 石綿敏雄2001年『外来語の総合的研究』東京堂出版p85

iii 日本語に既存の類義語があり、翻訳して受容することが可能なのにしなかったという意味で必要に迫られない不翻訳がなされたと考える。

iv 必要に迫られない外来語受容の背景にはファッション性、目新しさのようなムードを重視する言語感覚があると考えられる。

レビの中での台詞等からデータをとった。調査は「ブロウ」などのように名詞でも動詞でも使われるものを初め、「イメージアップ」などの複合語など何らかの形で英語が含まれる用例を文例とともに採取した。用例は総数200例、異語数にして106語になる。データの形式は、語形「文例」(意味)、<資料番号・資料ジャンル>用例通番の項目によって整理した。具体的にはつぎのようなものになる。

ブロウ「髪と毛先にブラシを回しながらブロウした後、スタイリングクレイで毛束感を。」(ドライヤーで風を当てる)<188ヘアー・雑誌>
145

採取した用例が、英語の用法に添うか否かという観点で辞書と英語母語話者1名^vのネイティブチェックによるチェックを行い、日本独自の用法をもっていると判断されるものを考察の対象とした。^{vi}

このようにしてとりあげた語について、実際の使用状況と使用意識についての調査を行った。先行調査として8名から聞き取り調査をおこない、ここで観察される傾向を確認するために280名を対象とする量的調査をおこなった。

男性に比べて女性向けの雑誌が多いこと、言語の吸収の早さ、流行に対する敏感さという点から対象者は10歳代後半から20歳代前半の女性に限定した。

アンケートに用いた調査票は10項目にわたるが、本稿の「get」にかかわる項目は以下のものである。

4. 「液晶テレビゲットしちゃった。」

①「ゲット」を日本語に言い直すと? (複数回答可)

- | | | |
|---------|--------|---------|
| ・ 買 う | ・ 拾 う | ・ もらう |
| ・ 当てる | ・ 獲得する | ・ 手に入れる |
| ・ モノにする | ・ 捕まえる | ・ しとめる |
| ・ 盗む | ・ 受け取る | |

その他 (自由記述)

v 英国出身、英語教師20代女性

vi 本稿の元になった卒業論文でこの作業のなかで特に意味拡張の類型を帰納する上で典型的と思われる「アタックする」「ゲットする」「ファイトする」「フィットする」「イメチェン」「プチプリ」の6語をとりあげ分析を行った。

- ②どれが一番入手する印象が強いですか？ 強いと思う順に1から3まで数字をいれてください。

「クイズに答えて商品をげっと」()

「クイズに答えて商品をゲット」()

「クイズに答えて商品をGET」()

3. 「ゲットする」の意味範疇と語彙の枠組みへの組み入れ

以下、「ゲットする」が具体的にどのような意味範疇をもって使われているか、またそれが本来の英語のゲットとどのような意味的張り合い関係をもちながら日本語の中に組み入れられているかを明らかにしていく。

3.1 英語本来の意味におけるゲットとの共通性、特異性

ー日本語としてのゲットの役割

ここでは「ゲット」の原語の意味と外来語としての意味を比較しその共通点と相違点を整理する。その上で日本語としての特徴を明らかにする。英語において get とはその前後の文脈により「連絡をつける」や「聞き取る」など様々な意味になるが、ここでは「得る」「手に入れる」という意味範疇においての用法に限定して比較を行う。

3.1.1 英語の原義的意味とgetの用例

辞書的な意味以外で get に関しての情報をネイティブスピーカーに尋ねると次のような説明を受けた。

get : 何か物を手に入れることや受け取ること。通常、物事の変化については言わない。

She got skinny (彼女はガリガリになった) という言い方をしないこともないが、文法として正しくない。そして表現としても嫌味で好ましくないとと言える。She got man (彼女には男ができた) も同様、本人に面と向かって言うような言葉ではない。

このように英語において、物事の変化については通常ゲットを使わない。

これに対し日本語の中では肉体の変化などについてゲットを使う例が見られる。またゲットという言葉が、英語 (GET) と片仮名 (ゲット) で表現されているということに注目したい。まず、雑誌、広告等から収集した用例をいくつか挙げる。なお用例番号は通番に用例の資料番号を示している。

用例

- 1-67「結果は太ももスッキリ、足首キリリのメリハリ脚をゲットできた。大成功！」『non-no』2001年5/5号（文章の一部—器具による運動で痩身を試みた結果）
- 2-66「お題「最近ゲットしたもの」」『FRaU』10/22号（DoCoMo カメラつき携帯の宣伝）
- 3-71「ショップでラスト1個をGET」『FRaU』10/22号（DoCoMo カメラつき携帯の宣伝—指につけた指輪を撮影した写真に添えられているEメールの文章）
- 4-73「MATCHを飲んでチャコールフィルター学園出張 LIVE 権をGETしよう!!」『FRaU』10/22号（キャンペーンの宣伝）
- 5-67「アンケートでは圧倒的支持率をゲットした愛可さん。」『non-no』2002年7/20号（文章の一部 —愛可＝髪形についてのアンケートで、一番人気の高かった髪型をしているモデル）
- 6-70「ノベルティー&冬アイテムゲットしちゃって下さーい。」手書きのハガキ（洋服ブランド ozone community よりフェア案内。20代女性の店員より）
- 7-74「大胆なちょうちょや内側の光沢のある布で、一気に主役GET!」『non-no』2001年5/5号（写真つきの商品紹介—夏物のバッグについて）

これらの用例の中からゲットという言葉の使われ方を考察したところ、いくつかの特徴が見えてきた。それぞれの例文において「ゲット」が示す意味を挙げ、その内容について詳しく触れていく。

3.1.2 変化すること、なることという意味での「ゲット」

用例1-67「結果は太ももスッキリ、足首キリリのメリハリ脚をゲットできた。大成功！」

ここでは、鍛えたことによってスッキリと引き締まった脚へと変化したことについて、「～な脚になった」ではなく、「～な脚をゲットできた」と表現している。ゲットしたというとあたかも全く別の脚をとってつけたようだが、実際には自分の脚がスッキリと細いものに変ったことを指す。ここにはじ

わじわと変化していく過程は感じられないが、劇的に変化したという印象を受ける。「～になった」という表現は自然に変化した可能性を含むのに対し、「ゲットできた」という表現には、理想化された望ましい状態と、それを得るための努力性が関わっていると考えられる。

例えば、脚を細くするという目標をたてたとする。目標の姿にほんの少し近づいても、また反対に元より太くなったとしても、元の脚の状態と比較し、「少し引き締まった脚になった」または「前よりガッチリした脚になった」と表現することができる。ある時の状態を基準に、「～になる」という表現はプラス（細くなる）の方向にも、マイナス（太くなる）の方向にも向かう。それに対し「ゲット」という言葉が向かう先は、目標の方向、つまり細くなる方の一方向であり、太くなるという方向には向かわない。また完全に細い脚になったその時にならないと、ゲットしたとは言えない。

- ・ プラス方向への変化
- ・ 理想化された完璧な状態への到達

この用法において「ゲット」は「～になる」という訳があたらない。この意味で「ゲット」が「～になる」よりも限定的な意味用法を獲得しているといえることができる。

3.1.3 買うという意味での「ゲット」

例文は2-66と3-71は同じ商品の宣伝で、一続きになっている。

2-66「お題「最近ゲットしたもの」『FRaU』10/22号（DoCoMo カメラつき携帯の宣伝）

3-71「ショップでラスト1個を GET」『FRaU』10/22号（DoCoMo カメラつき携帯の宣伝—指につけた指輪を撮影した写真に添えられているEメールの文章）

メールのやりとりで、A氏が数人の友人に「最近ゲットしたもの」というお題を出したところ、みんなから写真付きでメールが送られてくるという設定になっている。例文66では、文脈から「GET」は「買った」の意味であると推測できる。しかし、ここでは単に買ったのではなく手に入りにくいものの最後の一個をやっと手に入れたという例である。

- ・ 「ショップでラスト1個を買った」

・「ショップでラスト1個を GET」

「買った」では買った物がたまたま最後の一個であったという意味にもとれる。それに比べ、「ゲット」というと「本当に欲しかった」「手に入りにくい」ものであるというニュアンスがあることがわかる。

さらに、売り切れ寸前商品の最後の一つを手に入れるというのは、大量にあるものの中から買うのとは思い入れが違う。直接誰かと競い合って買っているわけではないのだが、誰かに買われる前に自分のものにしたというある種の優越感、または安心感を含む喜びをこのゲットは表していると思われる。

例文6-70は店側が商品の購入を催促しているものである。

6-70「ノベルティー&冬アイテムゲットしちゃって下さーい。」手書き
のハガキ（洋服ブランド ozone community よりフェア案内。20
代女性の店員より）

「買ってください」と言うのと店の利益優先という面が先にたち商品の価値が見えにくくなってしまうが、「ゲットしてください」というのは客にとって買う価値があり、しかも購入者の競争率が高いように聞こえる。「ゲット」という言葉はお金のいやらしさを表に出さず、買うということの一番楽しい部分だけを表すことができる。

- ・強い欲求
- ・入手の困難さ・高い価値
- ・競争性

この3点において「買う」よりも限定的な意味用法を「ゲット」が獲得しているということができる。

3.1.3 価値あるものを受けること

＜変化＞＜購買＞を意味する get 以外にも、価値観にかかわる用法がみとめられる。

4-73「MATCH を飲んでチャコールフィルター学園出張 LIVE 権を GET しよう!!」『FRaU』10/22号（キャンペーンの宣伝）

ここでは、「MATCH を買って応募し、文化祭に「チャコールフィルター」^{vii}を呼ぶ権利を当てよう」と言っているのだが、こうやってしまうとこえて理解しにくい文章になる。先ほどの＜購買＞の get にも関係するが、

この「ゲット」では<高い価値>のあるものを<競争>の中で獲得するという意味が認められる。

「メリハリ脚をゲット」のようなく変化>に関わる get では理想的な状態を獲得するための<努力性>が認められた。そのような努力性が何もないのに結果的に<好ましい状態>を得ることにゲットは使われる。

5-67「アンケートでは圧倒的支持率をゲットした愛可さん。」『non-no』
2002年7/20号(文章の一部 —愛可=髪形についてのアンケートで、
一番人気の高かった髪型をしているモデル)

この例は、真似したいショートヘアというアンケートで、あるモデルの髪型が人気だったというものである。本人はファッションモデルであってヘアスタイルで読者から評価を得ようとは考えていないであろうと考えられる。結果的に読者から圧倒的な支持率を得たということになっている。このように本人が意図せずして何か価値ある結果^{vii}を得た時、第三者はその様子をゲットしたと言うが、本人はゲットしたとは感じないであろう。

このように日本語におけるゲットは、使用場面によって<望ましい状態への変化><入手困難な者の購買><のぞましい地位・権利の獲得>という用法に拡張していることがわかる。この意味拡張においては<価値のあるもの>や<望ましいもの>を得ることにのみ使われ、好ましくないものを得る時には使われない。そこには<努力性><競争>があることがわかった。

3.2「ゲット」の日本語としての位置

前節ではゲットが本来の意味から日本語独自のどのような意味拡張をおこない受容されているかを記述した。ここではその意味拡張の実態記述の傍証として、使用者自身がどのような意識で「ゲット」を用いているか、現代日本語の中でどのような位置づけをされる語であるかを明らかにしていく。

vii 学園祭のゲストのグループ名

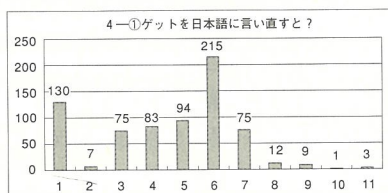
viii このモデル自体はいかにきれいに洋服を見せることができるかというのが仕事であり、髪型で人気をとうろうと思っているわけではない。自分の意志とは関係なく、スタイリストの希望によってそのような髪型になっているものと考えるのがさざられているという可能性がある。

- ・ プラス方向への変化
- ・ 理想化された完璧な状態への到達
- ・ 強い欲求
- ・ 入手の困難さ・高い価値
- ・ 競争性

実際の用例で帰納される上述の意味用法が中心的な使用者である若年層にどのような意識でとらえられているかを確認するためのアンケート調査を行った。アンケートでは、「ゲットという言葉日本語に言い直すと？」という質問をし、次の12項目の中から複数回答可能とした。

- | | |
|----------|----------|
| 1. 買う | 2. 拾う |
| 3. もらう | 4. 当てる |
| 5. 獲得する | 6. 手に入れる |
| 7. モノにする | 8. 捕まえる |
| 9. しとめる | 10. 盗む |
| 11. 受け取る | 12. その他 |

表 7



この結果を多かったものから順に並べると、次のようになる。

- | | | | |
|----------|------|----------|-----|
| 1. 手に入れる | 215人 | 7. 捕まえる | 12人 |
| 2. 買う | 130人 | 8. しとめる | 9人 |
| 3. 獲得する | 94人 | 9. 拾う | 7人 |
| 4. 当てる | 83人 | 10. 受け取る | 3人 |
| 5. モノにする | 76人 | 11. 盗む | 1人 |
| 6. もらう | 75人 | | |

これを見ると、上位6位までは先ほど述べた用例による考察とほぼ同じ意味で使われていることがわかる。そしてここではさらに、「もらう」という言葉もゲットに置き換えられるとの回答が見られる。7位以降は1人という数を含む少数派意見であるが、図7をみると6位より上位の意味用法の回答者数との差が目立つ。1位から6位までは「手に入れる」「モノにする」など少し意味範囲が広いが、全体的に見て「正当な」方法で、しかも「自分が望んでいるもの」を入手している。それに対し7位から11位は、「盗む」「拾う」など正当性は曖昧でしかも必ずしも望んだものが手に入るわけではない。

ものがある。「捕まえる」「しとめる」といった言葉にしても、例えば「泥棒を捕まえる」や「からすをしとめる」など、その物体自体に価値があるとは言えないようなものを得る例^{ix}がある。

以上の結果からも、日本語に受容された「ゲット」は次の点で意味拡張をおこしているとまとめられる。

対象：プラス評価をされるもの・理想の姿状態・人気・他者の支持・地位
方法：競争・努力による入手の困難さの克服(手段の社会的正当性含む)

今回の調査の中で、ゲットとその他の日本語を使い分ける理由がみえてきた。一つは、用例2-66の「お題 最近ゲットしたもの」に対する返答であるが、宣伝の中では用例3-71以外に、彼氏とツーショットの画像をメールに添付し返信してくるというものがあつた。人間関係の「彼氏」をもの扱いしているところに、この広告作成者のねらうユーモアがあるが、この「彼氏」が「いいもの」でありなんらかの「競争・努力」の結果であることが含意されている。

逆に「ゲット」と近い関係にありながら「ゲット」といえないものがでてくる。日本語の中では、人気や支持などは自分の努力ではなく他者から与えられるものであるという概念があると考えられる。例えば「人気No1の座をゲット」のように具体的な地位の形であれば可能であるが、抽象的な人気や支持は「ご支持いただく」「多くの支持を得ている」などの表現にあり「ゲットする」はこのような文脈ではつかうことができない。意味を広げていく中でもやはり、カタカナ語を積極的に取り入れる文章か漢字仮名交じりの保守的な文章かといった文体の制約が存在することがわかる。

4. お わ り に

以上、日本語に受容される英語動詞の典型例としての get をとおして、これが日本語のなかに組み込まれていく過程でどのような意味拡張をおこすかを明らかにしてきた。＜望ましい状態への変化＞＜入手困難な者の購買＞

ix 「受け取る」という回答も少数ながら見受けられたが、これは「メールを受け取る」という場面を限定したものが多かった。理由の一つに映画のタイトルにもあつたが、ユー・ガット・メール (You've got a mail) というフレーズの影響が考えられる。

＜のぞましい地位・権利の獲得＞という用法に拡張し、そこには＜努力性＞＜競争＞という要素があることがわかった。そしてこれらに共通する意味特徴は以下の5要素であるとまとめることができた。

- ・ プラス方向への変化
- ・ 理想化された完璧な状態への到達
- ・ 強い欲求
- ・ 入手の困難さ・高い価値
- ・ 競争性

これをさらに抽象的にまとめれば「プラス評価をされるもの、入手の困難なものを競争・努力によって克服し獲得すること」を「ゲットする」と言っているということになろう。

今回の研究を通して、英語が組み込まれた日本語が使用される理由が見えてきた。言葉とは概念を表すために存在するが、例えば「クロス」という言葉が主に十字架の形をしたアクセサリーのことを表すのに対し、「十字架」という言葉は宗教的な要素が大きい。このように表面的には同一の概念でも、それは様々な側面をもっている。その細かな違いを区別し、言葉と概念とを結びつける動きが起るとき、新語が生まれる。

本論文の中で、概念を説明的ではなく、ひとつの単語として表すことは伝達の上で効率的であるということを述べたが、効率性は現代社会にとって非常に重要なことである。ここ数年で著しく発達したものの代表として携帯電話が挙げられるが、その機能の中で重視されるのは通話機能ではなく、インターネットである。小さな画面では一度に見られる文字数に限りがあり、その中で人の注目を集めるには、簡潔に要点をつかんだ文を作る必要がある。Eメールも同様だが、メールは手紙とは違い基本的に日常会話のような形態でやりとりをする。しかし口で説明するには容易なことでも書いて説明すると冗長で要領を得ない文になるということはよくある。アンケートの予備調査で聞き取りを行っているとき、「ゲットするという言葉は書くけど、口では言わない。」という意見があった。これまでは会話の中で行われた意思疎通が、書き読むことで「会話」をするという方向へ向かっている。「ゲット」という1語が、「欲しかったものをやっと買った」という意味を表すように、長い説明を必要としない単語は、書き言葉で「会話」する上でより有利であろう。

また話し言葉として使う外来語にも利点がある。漢字は表記には強いが、

発音上は同音異義語が多く混乱を招きがちであるのに対し、欧米系の外来語は語彙の少なさの関係もあるが、発音上、また表記上の混乱が少ない。日本語が英語を取り入れた表現を好む理由は、英語としての性質をそのまま受け入れ日本語母語話者の英語力をつけることを目的としているのではなく、漢語使用が飽和状態になり限界が見え始めている今、英語という新しい系統の言語を組み込み、その方向に日本語の発展を見出そうとしているからではないかと考える。

「GET」「ゲット」「げっと」などそれぞれの表記がもたらす印象について顕著な違いが見られたことにも表れているが、これからの日本社会はますます読み書きに重点を置く事になると思われる。今後はそのような観点も含め、日本語母語話者の言語使用意識を元に日本語の実態を追究していきたいと思う。

参 考 文 献

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 石綿敏雄 | 2001『外来語の総合的研究』東京堂出版 |
| 石野博史 | 1985『現代外来語考』大修館書店 |
| 西光義弘 | 1990「言語接触のタイプ」『言語研究』98 日本言語学会 |
| 亀井孝他編 | 1996『言語学大辞典』第6巻述語編 三省堂 |